

シンポジウム「反転学習はディープ・アクティブラーニングを促すか？」 参加報告（2015.2.24）

小林雄志（熊本大学大学院社会文化科学研究科教授システム学専攻 特任助教）

2015年2月24日（火）に関西大学千里山キャンパス（第2学舎4号館BIGホール100）において、関西大学教育開発支援センター主催のシンポジウム「反転学習はディープ・アクティブラーニングを促すか？」が開催された。本シンポジウムは関西大学が文部科学省の平成26年度「大学教育再生加速プログラム」に採択され、「21世紀を生き抜く考動人<Lifelong Active Learner>の育成」事業の一環として実施されたものであった。

講演に先立って、会場のロビーにてシンポジウム参加者による21演題のポスター展示が実施された。このポスター展示は、参加申し込みの際に「反転授業を実施したことがある」と回答した参加者が発表を依頼され、実施されたものであった。特筆すべき点としては、自然科学、情報工学、古典文学、外国語、数学、医療、知財学習など幅広い分野における発表が行われていたことであろう。既にさまざまな分野において反転授業が実施され、どのポスターにおいても活発なディスカッションが行われていたことから、今後は反転授業における異分野間の交流が盛んに行われるであろうと予想された。その後行われたシンポジウムでは、東京大学の山内祐平氏、京都大学の溝上慎一氏、東京大学副学長の吉見俊哉氏による講演が行われた。山内氏より反転授業の海外事例（サンノゼ州立大学、スタンフォード大学など）についての紹介があり、反転学習とアクティブラーニングの組み合わせは難しく、海外でも多数の事例がないことなどが述べられた。溝上氏の「アクティブラーニングとしての反転授業」と題した講演では、大規模人数によるアクティブラーニングの実践に関する事例紹介などが行われた。また、吉見俊哉氏による基調講演では、自身の論文を学生に批判させる（自らがサンドバッグとなる）「Attack Me」という授業の事例紹介などが行われた。このように、本シンポジウムを通じて反転授業・アクティブラーニングに関する極めて先進的な事例について知ることができたが、我々のプロジェクトにおいて養成を目指す「社会人の学びなおしを支援する教育専門家」にも、こうした高度な反転授業・アクティブラーニングを設計し実施できる資質を身に付けられるよう、教育パッケージの開発を進めていきたい。